

意見を表す動詞の補足節における叙法選択と話者の推測

井上大輔

上智大学大学院博士後期課程言語科学研究科言語学専攻

SOUTET(2002)は、疑問文において直説法が用いられるのは、**que** 以下が真実であることが、発話の主語 (*sujet d'énoncé*) から切り離されているにもかかわらず、発話行為の主体 (*sujet d'énonciation*)によって保証され続けているからであると述べている。神父が洗礼志願者に対して質問をする時に、(2)に違和感を覚えるのは、(1)は発話行為の主体である神父が **que** 以下の内容を引き受けているのに対し、(2)は発話行為の主体である神父が **que** 以下の内容を引きうけておらず、洗礼志願者に対して疑問を投げかけているように感じられるからであると、主張している。

(1) *Croyez-vous que le Christ est ressuscité des morts ?*

(キリストは死から復活したとお考えですか?)

(2) *Croyez-vous que le Christ soit ressuscité des morts ?*

(キリストは死から復活したとお考えですか?)

(Soutet, 2000, 81)

また、WINTERS(1989)も(3)に関してやはり、発話行為の主体が **que** 以下の内容を事実だとみなしているかどうか **que** 以下で直説法が使われるか、それとも接続法が使われるかを決定するとの意見を表明している。

(3) *Crois-tu qu'elles soient/sont parties ?*

(Winters 1989, 721)

しかし、Frantext を探してみると、(4)のように発話行為の主体ではなく、発話の主語である **tu** が **que** 以下を事実だと見なしていると話者が判断しているため、直説法が使われているとしか思えない例が多数見つかる。

(4) - *Quelle plaisanterie, madame Lerat ?*

(何の冗談でしょうか、ルラ婦人?)

- *Crois-tu que je ne vous ai pas vus passer dans la galerie ?* Ma parole, je n'en croyais pas mes yeux.

(あなたがギャラリーを通過するのを私が見ていないとでも? なんとまあ、我が目を疑いましたよ)

本発表では、*croire* に代表される意見を表す動詞 (*verbe d'opinion*) の **que** 節で見られるこのような現象に対して、従来は考えられてこなかった、聞き手の思考に対する話者の推測が叙法選択に影響を与えている可能性について検討する。